

# 視覚文化と地域研究

博士過程での研究を通じて、視覚文化における地域研究の重要性について訴えてきた。要するに私は、「アフリカ」の話をしているのではなく、全く異なる立ち位置からの、まったく異なる世界の見え方について話をしてきた。その重要性が、最悪の形で実感されている。10月以降イスラエルによるガザ地区への侵攻とヨルダン川西岸での攻撃は激化の一途を辿っている。

ある地域では「レジスタンス」とよばれるものが、別の地域では「テロリスト」と呼ばれるということは、グローバル・サウスの視点を巡って真っ先に挙がる議題だろう。また美術と非西洋を巡っては、2022年のドクメンタ15での作品撤去、その前には2019年にアシーユ・ンベンベの発言が「反ユダヤ主義」批判など、イスラエルの植民地支配を巡る問題がしばしば表出していた。



MINEでトークする中村氏

今回の事態がアフリカ諸国に直接及ぼす影響は、例えばロシアのウクライナ侵攻等と比べて小さいが、むしろ欧米の対応の二重基準を見せつけられたことの意義が大きい。美術においては、2010年代半ばから大陸の近現代美術と他地域接続のハブとして機能するモロッコと南アフリカが明確に反イスラエルの立場を打ち出したため、世界との関わり方に、やがて変化が現れるだろう。

これを「断絶が深まってしまった」と表現する向きもあるかもしれない。しかしこと美術にかんしては、非西洋はずっと「美術」の外側・劣位におかれてきたことを併せて考えるべきである。「断絶」もなんも、そもそもいないことにしたのに。

アラブ圏やアジアのイスラム圏が、「西側」の世界観に同意しない様子が可視化される一方で、欧米諸国の対応の差も明らかになった。筆者の研究では、数年前から「欧米中心性」よりも「英米中心性」を問題としてきた。

特に、美術の人種やジェンダーの観点での修正にさえ、英米中心性が現れることについて。ポストコロナル研究の「先進地」であったはずの国と都市で、典型的な入植と占領に向けた批判の言説が封じれることを通じて、その英米中心性の問題が露になっている。

また、クリスマスのページェントで耳にする、ベツレヘムやガリラヤといった地名が入植暴力の舞台となり、初期キリスト教の文化財がボロボロと壊される事実の背後にも、西洋近代美術のスコープ（宗教絵画の用途性を超えたところに芸術性があるというそれ）と結びついた文化財保護のヒエラルキーを見る。ギリシャの彫像や西アフリカの仮面はわざわざ持ち出して「我々のもの」として安全に保管されるのに。

地域研究は、地域の目線で西洋を「客体化」しなげすことで、それまで自明に普遍性や理性の側におかれてきた「西洋」の分解的理解を伴う。博士論文では、「仮想敵」像の固定化ともいうべき、曖昧な知見に基づく西洋中心性と美術の批評について論じる。1月末の公聴会と、公開にも関心をお持ち頂ければ幸いです。（中村融子）

## 今月のこの世界



え・ごっついの

十一月号 (10号)

2023年(令和5年)11月

山中suplex

〒520-0017 滋賀県大津市山中町91-4

www.yamanakasuplex.com

### 扉を開く - 前谷開の新婚写真 -



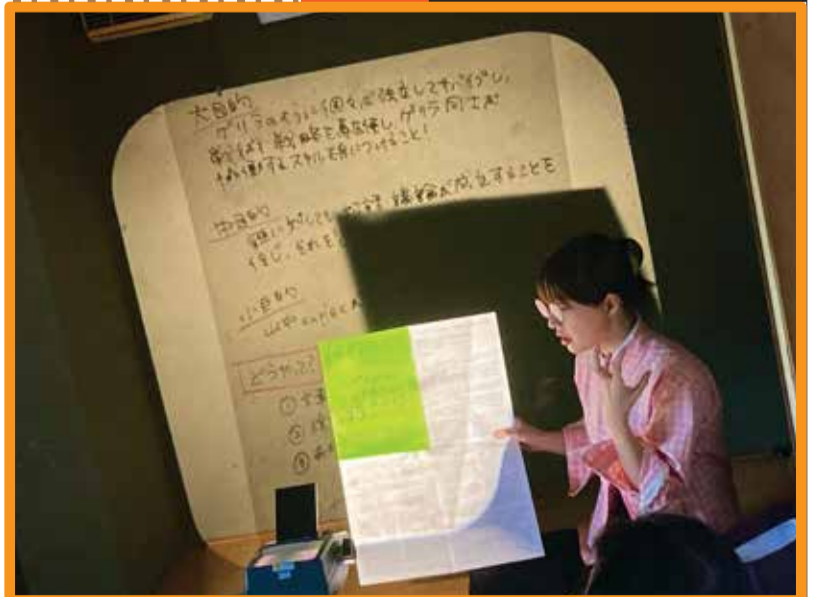
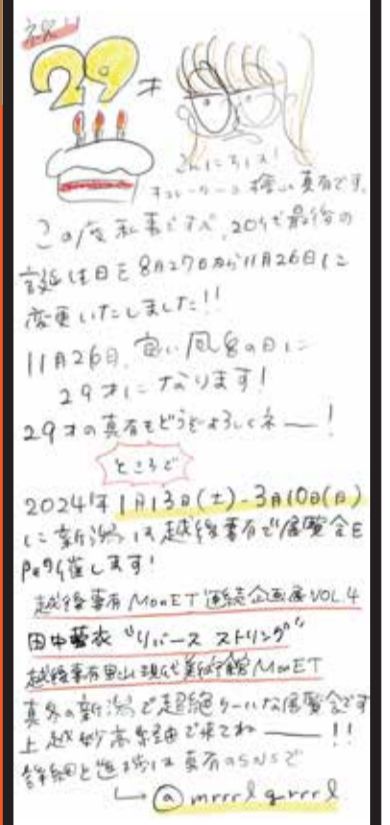
《遠足、浦賀をめざして、八景島》

私はキュレーションが好きだ。好き勝手におもしろおかしいことを言ったら、無謀なことを言えば言うほど、周囲の人たちがそれ以上のものを見せてくれる。それが仕事になって、お金を稼げるなんてこんな都合の良いことがあるのだろうか、って時々自分でもおののく時がある。

### キュレーターという人たちについて

キュレーターは展覧会を作る人のことでもなく、アートの携わる人のことでもなく最近思う。語弊を恐れずに言えば、気持ちだけで生きていくのがゆえに、人生が迷走しまくっているように見える人たちが、人生のた行き当たりばったりで人生そのものを打算無しで直感にフルベットしている人たちが起こすささやかな奇跡のことをキュレーションと呼びたい気持ちすらある。ささやかな奇跡を起こす方法は割とメソッド化されていて、「暇です」と笑顔で返す、面白い企画を立てる、

キュレーションは楽しい。もっとキュレーターが増えて欲しいと常々思っている。おもしろいキュレーターの先輩はすでにたくさんいて、山スーの堤拓也さんもその一人で、最近は何か政党に入党したいとか言い始めている。確信を持ちながら迷走している。迷走しているはずなのに、なぜか確信を持っている。私がまわりまわって、なぜか日本の時価総額10位以内に入る大企業でキュレーターとして働いていることもおもしろがって欲しい。キュレーターが行く道はいつもけもの道だけれど、楽しい。自分で道を切り開く野心とスリルと、何が起ころうとも絶対に自分が選んだ道は間違っていないと十分に示すほうに自分を賭けることは、生きてるぜ！って感じがする。（檜山真有）



キュレトリアル・ゲリラ・ワークショップ中の檜山氏





作：小笠原周

## 今月の機材

マキタ Y150N

今回の機材はマキタの電気溶接機です。一口に溶接機といっても電気やガスにレーザーなど色々な方法があり、この溶接機は電気のアーク放電を用います。さらにアーク溶接の中でも様々な種類に分けられ、アーク溶接の中で一番簡易な手棒溶接（正確には被覆アーク溶接）用です。

西日本用の電源周波数60Hz仕様で裏側の端子の付け替えで単相100Vと200Vの切り替えができます。200Vの方が圧倒的にスタート時のアークが発生しやすいので基本的に200Vで使います。スタートにコツが要りますが溶接棒の周りを覆っている被膜材が直接溶接箇所を保護するシールドガスを発生させる為他の溶接方法と比べると風に強く野外でも使うことができます。

ボディに大きくマキタとありますが、製造は現在は育良精機の溶接機を手がける曾根工具製作所によるものです。先週かなり傷んでいた溶棒ホルダーを頂き物と交換し、年代ものの本体と不釣り合いなくらいに綺麗になりました。（本田大起）



## たのしかったうんどうかい #2



パン食い競走後の口の中を見せる筆者

「運動会の話の続き、いつ読めるん」とMINEに来たお客さんから唐突に言われ、ちゃんと月報読んでくれる人っていいんだなと思う反面、なんかもう一年以上前の出来事で、全然覚えてねえやと思って写真を見返してみる。前回の記事からすると結構緊張してたかと思っただけ、身に覚えのない自身のはしゃぎようを見て肝が冷えた。あわよくばこの連載をやり過ぎそうとしていた裸としてここに掲載いたします。（坂本森海）

## はたらかないのりもの

十五万円とスバルとチェコビール 若林亮

二週間前までそんな予定はなかったのだが。ずいぶん前に一度「キプロスって国でビエンナーレがあって、観に行くと一緒に行く？」と声をかけられた。カウンターで呑んでる時にその時はお金に余裕もないしインドネシアに行く予定もあつたので、「いや〜さすがにそんなに海外行ってる余裕（金銭的にない）ですよ。というかキプロスってどこ？」くらいの返事しかしてなかったのだ。そして出発二週間前。キプロス共和国は鉄道が無く、タクシーも一部しか走ってないからレンタカーじゃないとかなり不便。しかも行くと言っていた三人は誰も海外運転経験が無く、そもそも運転したくないのだそう。ということで運転してくれ。っていうお願いが来た。インドネシアで運転したかったのにも出来なかつたモヤモヤも、まだ全然晴れてない時だったので行こうと決意。国外運転免許証は難なく取得。五分、二、三五〇円だった。むしろそこに書かなくてはいけない自筆・筆記体でのサインの方が時間がかかってしまった。レンタカーは日本から予約。一週間で十万円弱のレンタル料なのに十五万円のデポジットがかかるだ！？しかも本人名義のカードで現地決済のみだ！ということとでそこだけドキドキしながら一人現地へと向かった。つたない英語で会話しつつなんとか決済は無事に完了。他の御三方が来るまで六時間ほど。一人でキプロス島内をドライブ。ヨーロッパ方面からの旅行者が多く、ザ・バカンス。という雰囲気。キプロス共和国は地中海に浮かぶ小さな島国で、面積は四国の半分くらいだと言われている。なので一日で一週できてしまうくらいの大きさだ。

## アメリカ滞在記 #5 「On "the way of" the Road」

この旅の相棒に決めた日産ローグというSUVを借り、10月1日にニューヨークを出発。ロードトリップの最初の目的地のシカゴとイリノイのミシガン湖畔で充実した二週間弱の滞在を終えた私は、10月20日ニューメキシコのサンタフェにいた。年に二日のみ（今年は4月1日と10月21日）一般へ公開されているトリニティサイトを訪れるため、その日に合わせて前日に到着することにしたのだった。

しかし、ここで旅は中断する。父が亡くなり日本へ急遽帰国することになったからだ。ロスアラモスにいる友人のレイアと彼女の両親があらゆることを世話をしてくれ、次の日にはサンタフェからデンバー行きの飛行機に乗ることができた。そしてデンバーからサンフランシスコを経由して羽田空港に到着したのは22日の朝4時半だった。ちょうど六ヶ月ぶりの日本では死後事務などで慌ただしく、母と久しぶりに三週間生活を共にし、あっという間に時間が過ぎていった。また日帰りで訪れた京都で運よく山中メンバー数名とも会うことができ、近況を報告しあった。そして私は再入国で到着したロサンゼルスの入管で別室送りになり、2時間以上の入国審査を経てロサンゼルス→デンバー、デンバー→サンタフェの二本の国内線を逃したのち、次の日の代替便でサンタフェへ無事戻り、ロードトリップを再開。今はラスベガスにいる。（観光ビザで一年間アメリカに滞在する方法とその苦難を学びました。ご興味ある方は気軽にご相談ください。）

このような長期間日本を離れること自体初めてで、一年後戻ってきた時には変わらない日常がそこにはあって、また元の生活に戻るだけなのだ。出発した時にはそう思っていた。ただ唯一心残りがあるとすれば、MINEの終わりを見届けることができないことぐらいかと。

まだ旅の途中だが、この旅はあらゆる意味で私の価値観、人生観を変えることになった。もう少し書きたいが、まだ色々整理がつかないことがあり、ここで筆を止めることにする。月報MINEに次号があるとすれば、その頃に私はニューヨークに戻っているかもしれない。それでは皆様安全運転で参りましょう。

最後に今までMINEに立ち寄ってくれた皆様に感謝を申し上げたい。ありがとうございました。BBQ盛大に楽しくやってください。せっかくなので私は一人カジノへ行ってきます。（石黒健一）

## 編集後記

11月号です！実は山中 suplex の別棟「MINE」は11月26日で終了したのですが、11月号を当日に間に合わせることができず、まあ遅れちゃったし聞き直つてのんびり作らせていただきました。がしかし、今回の記事は個人的に名作揃い。何度も読み返したくなる素晴らしい記事を寄稿していただきました。  
・10月7日、8日に開催されたキュレトリアル・ゲリラ・ワークショップ「山中 suplex、お前は誰だ？」より、檜山真有さん。  
・10月14日に開催された、トークシリーズ vol.9「万国博覧会的なものに代替する生態系：ベナン、フランス、日本（備前・信楽）から「陶芸」を起点に」より、中村融子さん。他、山中メンバーからの記事でお送りいたします。そろそろ冬用タイヤに suplex しないといけない季節になってきました。安全運転でいきましょう！

月報編集長 坂本森海

肝心のレンタカーはというと、スバルのX。なぜ海外に行つてまで日本車なのかというと、キプロス共和国は歴史的にみて色々翻弄されてきた国で、イギリス植民地時代があったせいか交通ルールはイギリス式で、日本と同じ右ハンドル左レーン。その影響か日本車が多い。トヨタに三菱。スバルは少し少なめ。日産のエクストレイルと悩んだが、スバルに乗ったことが無かつたのでスバルに。キプロスはラウンドアバウトと呼ばれる信号が無い丸い交差点が多い。日本では環状交差点ともいうらしいが。九割以上がこのスタイルで、最初は少し戸惑つたものの、慣れば信号機のある交差点よりもスムーズで勝手がいい。ウインカーはインドネシア同様みんな出したり出さなかつたり。あとスピードは速め。日本ではいうところの国道くらいの道では制限速度八〇キロ。細い道でも五〇キロ。横断歩道のあるあたりだけ三〇キロ。と、すぐ分かりやすい。しかしその標識が頻繁に出てきて速度調整が難しかった。そしてびつくりしたのが、高速道路はあるものの、無料なので気が付いたら高速道路に乗っていたこと。制限速度は一〇〇キロ。でもみんな一三〇キロくらいで飛ばす。二時間も走れば大きな街を二つ三つ通り過ぎるくらいの距離感。今回現地警察のお世話にはならず済んだのでよかったが、オフロードバイクの警察を一度だけ見かけた。ホンダっぽいバイクがカテゴリーが派手でハスクバーナとかかなくともかと思いつつ、これも近づいて聞けばよかったと後悔。

今回乗り物の話は申しできなかったが、バイクはそもそも数が少なく、車に比べると一割もいなかった。でもやはりどこの国にもヤンチャな輩はいるらしく、パリピな感じの人が多かつたりマシールという街では、海岸沿いの大通りを前輪を上げて走るいわゆるウイリー走行で走り回っているヤンキーな方々がたくさんいた。バイクの話はそれくらい。それよりもトルコが占領してしまっている島の北半分との国境？の壁のすぐ横で醸造していたチェコビールが最高にうまかつた。軍事境界線ともいべき壁の真横。一五メートルほど歩けば壁の上に自動小銃を持った兵士がいるような場所だ。

ビールの話ももっと書きたかったが、車との相性も良くないし、そもそも「のりもの」でもないから今回はこのへんで。